

## 竹 取 物 語

白 河 次 郎

## 緒 論

上下四千載、梓に上りたりし書冊は、合せて幾萬卷なりしぞ、而も百代を通じて其光榮を保つもの、果して幾冊なるべき、聞け、善美なる著書は、永久不滅れ生命を保つものなり、とミルトンは言ひぬ、然り其人は早く此世を去るを、あらず、其人の名は既に知られざれば獨り其善美なる著書は、此宇宙のあらひ限り、永久の榮を荷ひ、不滅の命を保つものなり、今を去ること一千餘年に  
出でたる、此竹取物語の如き、實に其一にあらずや。

## 梗 概

解題の順序として、吾と先づ此書の梗概を左に録しをかむ、

今は昔し、竹取の翁といふ者あり、野山にまじりて竹を取りつゝ萬の事につかひたり、或日竹の中に三寸許ある、いと美しく耀ける少女を見出せしより、之を取りて養ひしが、すぐくと大きになりきざり、類なき美人となりぬ、名をば赫哉姫とつけつ、之を聞ける皇子公達、夜晝思をかけ、終に之姫の望みに従ひ、或は佛の御石鉢をたづね、或は蓬來に黄金の枝を取り、或は龍の腮の玉を探り、或は火鼠の皮衣を求め、或は燕の子安貝を捜るなど、備に辛苦を嘗めしも、赫哉姫終に靡りず、時の帝の叡聞に達し、所謂天子の尊と四海の富とを以て、之を靡らせむとし給ひしも、姫は之を従はず、八月十五夜、迎の使に伴はれて月の都に歸り去りき。

斯の如く、其趣向に於ては、固より荒誕不稽なる小説に外ならず。

## 作者及年代

竹取物語の作者と、其何時の頃にか出でたるかは、古來猶定説なき様なり、或は其作者は源順ならむと云ひ、或は翠帳紅閨の中より出でたるべしと云へり、何れにもせよ、其文學史上の特徴より見れば、平安朝に属すべきは固よりの事なるべし、本居の大人は、延喜よりこなたのものをどと定められど、源氏物語の繪合の巻にて、竹取物語をば、諸の物語の出でき初めの祖としりし、田中大秀氏は、同じ書に繪は巨勢の相覽、書は紀貫之書けりとあるに據りて、延喜以往より在りし物なるべしと云ひき、小中村義象氏の日本文學史には、貞觀延喜の物ならむと見え、大和田建樹氏の和文學史には、貫之の前後にや起りつらめとあり、小中村博士は「げに、言詞古めかしく行文の狀の、土佐日記などに異なるを見ても、延喜よりは四五十年前の物にやと思はる」と云ひ日本文學全書の解題には、「先哲の考証せし所によるに延喜以往大同以後の著述ならむといひたれば、大凡千四百年代の末千五百年代の初にぞあるべき」と記せり、されば其出たる年代は、大凡延喜以往と定まれるに似たれども、其作者は今に微茫縹渺の裡に隠れをれり、假に其筆を天曆以還に揮ひたる源順なりとせんか、彼の源氏物語に云へる相覽の繪貫之の筆は、徒然草に所謂、小野道風が出たる朗詠集のたぐひとなりもやせん、其假字文なるが故に、假に女流の手に出たりとせむか、「男もすといふ日記と云ふもの」と讀みて直ちに土佐日記をば女流の作なりとなすの笑もや受けむ、三上高津二氏の文學史にて「此書の作者は、たとへ世人の傳ふる如く源順ならずとするも、尙學識深遠なる男子の手に成りしものなるを信するなり」と見ゆ。

### 平安朝の風俗、思想、及文學

竹取物語を知らむには、先づ當時に社會の風俗、思想、及文學を研究しをかむことを要す、茲に平

安朝と云へるは、普通の歴史の如く、桓武遷都より、源家の覇權を握るに至る迄、四百餘年間の事を云ふなり、

第一 唐風の流行と共に質樸粗野の風を捨て、華美艷麗となりしこと、

第二 佛法の弘通に從ひ勇壯活潑の心は失せて優柔懦弱となりしこと、

は奈良の朝より一層ひどうなりよきなり、浮華を貴び無常を感じ、高貴なる人は更なり、賢明なる人々も、男女兩性の間に嚴正なる區別もなく、藤原氏大權を握るに至りて益々甚しく、政務兵馬の事は皆之を其臣下に委ね、宏壯なる邸宅は門を並べて列なり、美麗なる園莊は屋を繞りて設けられ、今日は宴會あり、明日は歌合なり、冬は雪、春は花、夏は曲水の宴を張り、秋は紅葉の賀を設け、花は舞ふ狂蝶の如く、月に鳴く郭公の如く、半女半兒の貴公子は、笏を取り寛袴を着けて殿上に徘徊し、只此世をば樂しき夢の中に過さむとのみ思ひしなり、衣食の勞と云ふ事を知らねば民を憐れむの心なく、「衆に驕るの情のみは、婦人に戯むるの術と共に増長ま」たりき、さるが上よ、淺智少膽の人々なれば、常に其病を懼き、常に其死を懼れ、物怪を懼れ、惡魔を懼る、さまは神よ祈り、佛に禱り、加持祈禱、ひたすら神佛の冥護を得むと思ひ居れり、されど神に祈り佛に禱るの、其心には、名分を失ひ、人倫を忘れ、常に私慾私情を恣にし、其快樂とする所は、不潔汚穢の事に、あちさるはなりまき、されば三上高津二氏の文學史には、當時の文學をば左の如くに評まき、

「文學は、人心の射映なり、平安朝の人心と、艷麗優美なる、花は如く又月の如し、然れども柔弱にして氣力なく、淫逸にして節操を欠ぐ、されば此人心、文字にあらわれて、平安の朝の文學となり、其文學また翻りて人心を動かし、彼此相頼、まて四百年間の社會を左右したり」

試みに都を出で、田舎に向ひたぐひには、宛にも百花咲き亂をたる庭園を出で、野草生ひ茂れる郊原に入りたるの心地もやすべき、されど此等の社會は、文學を弄びたる社會にはあらずなり。

## 假字文

竹取物語を知らむには、先づ假字文を知らざるべからず、假字文を知らむには、先づ平假名の製作を知らざるべからず、人は其性として復雜を厭ひ、簡便を好むものなり、故に單に字体のみを取りて見るも、篆書は隸書となり、隸書は楷書となり、猶進みて行となり草とあるなり、我奈良の朝にありては、人々主と楷書を用ひたりしならむ、されば片假名の發明はありたるなり、されども、世の漸やく進むに從ひ點畫復雜なる漢字は、重に草体を用ゆるに至り、從ひて其字畫を省略し、自由便利なる平假名を作り出でつるなり、(先賢の考証によれば、弘法大師は之を發明せし人にあらずして、之を整頓せし人なりと云ふ)、此より、いろは四十七字は、支那文字數千の代りに用ひられ、始めて假字文でふ純粹なる我國の散文は、顯はを來り、物語なり日記など、紀行なり隨筆あり、滔々として文海に溢れ出でぬ、之が用法の先驅となりしは此竹取物語なりき、されど假字文は、猶ほ女子の玩具と見做され、假令先鞭の榮は竹取物語にあまど雖も、紀貫之の出で、之が範圍を擴め去迄、男子は猶ほ、文章には支那体を取り、歌又は万葉假名を用ひしならむ。

## 物語

竹取物語は、云はずとも物語部類の一なり、物語は云はずとも平安朝文學の最大部分を占めたるものなり、物語とは今の小説なり、而も言文一致の小説なり、夢野の鹿、浦島の子などの如きは、

上古の小兒的時代に於ける小兒的物語なりしが、假字文の流行と共に、口に語る儘之を文章に綴ることとなり、平安朝の盛時——婦人的時代——に至れば、婦人的小説は盛に行はせ、佛法、怪談、愛戀、無常等の説を交へ、巧に世態人情を綜合しめて、空中に樓閣を設け、單に人の好奇心を満足せしむるのみならず、更に進みて人の同情に訴へ、頗る高尚にまで精好なる小説とはなりしなり、かくて竹取物語は出でき。

### 讀者と主人公

竹取物語を評せるものあり、曰く、滑稽の材料を婦人に挑むに取しは、既に平安朝の文學たるを示すに足れり、斯く小説の結構即ち主人公の特質と、時人の傾向即ち讀者の思想とは、常に親密なる關係あるものなり、見よ、任侠の小説が、如何に江戸の市人に喜ばれたるか、復讐の物語が、如何に諸藩の若士にモてはやされたるか、「小三金五郎」の女流に於ける、「八犬傳」の青年に於ける、年少氣銳の士が、勇士の事績若くは戦紀を好むが如く、佳人才士が戀愛の小説を喜ぶが如く、古往今來の文學は、設想的のドラマを除きて、悉く特殊の傾向を有せるなり、さらば竹取物語は、如何なる讀者に向ひて作られたりしか、云はでも知るべき、平安朝の婦人若くは婦人的社會に向ひてなり、然らば其主人公として赫哉姫てふ婦人を取り、戀愛滑稽等を以て之を布置せしは、固より怪しむべきこと、但し其婦人をして、終に高崇純潔の風を失せざらしめしは、特に群小説の上に亭々たらしむべき所ならむ。

### 竹取物語と勸善懲惡

清冽なる一掬の水は、人をして爽快清涼ならしむ、されど水に滋養の物質ありと云はむと如何

に、月を見ては高妙の觀を起し、花を見ては優美の念を惹く、月と花と、畢竟高妙の眞体にして、優美の眞像なり、高妙と優美と、人をして自然に惡を避け善に就かしむ、ざるを見て、直に高妙と優美とをば、修身の一派となし、造化が月と花とを與へて、人に善を勸むとせむは如何に、いかにとなせば、涼清ある水も、時又は人を害することあり、高妙なる月も、時に之解脫厭世の念を惹き、優美なる花も、時には寂滅無常の感を起さしむることあればなり、そも文學美術は、宛も月の如きなど、花の如きなり、又清凉なる一掬の水の如きなり、人をして高妙の觀を起さしむるはあらむ、人をして優美の念を惹かしむるはあらむ、人をして爽快清凉ならしむるはあらむ、されど決して觀善懲惡を以て、其大目的とすべきものにはあらざるなど、ざるを強いて觀善懲惡を以て、目的となすべと云へるは、いつもながら東洋學者の僻見にはあらざるか、文學者の眼中には「優美」なるものあり、「高妙」なるものあり、「純潔」なるものあり、されど直接に「懲善懲惡」なるものなきなり、只其高妙優美純潔の念は發せて文となり、知らず／＼の間に人をして、道德宗教眞理を愛せまむることゝされるのみ、近代に至り、人智の進歩と共に、小説が人情風俗に影響することの大なるを知るや、悲しむべきは幾多の小文學者が、已を高妙優美純潔の念を有せずして、徒に淺薄の意を以て勸善懲惡を寓せむと試み、嘗に目から試むのみならず、私意を古人の大いに狹み、文學其物は次第に淺劣と下り行きぬ、竹取物語の出でたる時代の如きは、人智未だ進まず、小説が人情風俗を裨益することを知らざりければ、文學者たるもの、只其高妙優美純潔の念によりて、當時の事實を綜合し、却りて愛すべく喜ぶべき文字をなせるなり、古代れ小説の概して近代のに勝れたるも、之が爲るべき、ざるをわながちに、竹取物語をば諷刺規諫の意を寓

またるものとなさむは、却りて之をして淺劣なるものとせむ、斯の如きは、清涼なる水に滋養の物質あり、月に花に、造化の與へたる勸懲の目的ありと云はむと、まことに一樣ならずや。

### 竹取物語の被感化

文學は社會の反映なり何の文學か其社會の影響を受くるべき、されば竹取物語が感化を被りたるもの——假令隱微の裡にありとせざるも——大凡五種あるを覺ふ、

其結構の上には當時一般の思想、風俗、及佛教なり、

其文辭の上にて當時の國語及支那文學是れなり、

當時一般の思想、風俗に就ては已に前に云ひぬ、佛教、國語、及支那文學は之を後に説くべし、其感化れ何の點に及びたるやは、吾は將に條を分ちて、細論せむとするなり、

(未完)

### 水火風土ヲ一觀シ來ル

安東俊明

覆載間四大物アリ、火風水土即是ナリ、古人ハ木金ト併稱シテ(風ヲ除ク)五行ト云ヘリ、火風水土ノ物タル無機ノ体ニシテ高妙ナル有機的官能アルニアラズ熟レドモ此四者之ヲ仔細ニ觀シ來レハ却テ區々タル有機的官能ヨリ迴カニ卓越セル本体ト變動トアルヲ知ル、古ニ仁者愛山智者愛水ノ語アリ、火風ハ何者ノ愛スル所ナルヤヲ知ラズト雖吾人ハ其絶大至妙甚驚クベキ者アルヲ想見セズンバアラズ、且ツ此四者之ヲ人生行爲ノ諸點ト對照比較スルハ其間大ニ妙味ノ存スルヲ感シ、更ニ進ミテ查究スレバ此四者却テ人間行爲ノ師表タルベキ資格ノ自ラ備ハレルヲ觀ズ、奇ト謂ハザルベケンヤ、